令和５年度入学　看護学部　一般選抜・後期　試験問題の出典

種別	大問番号	著者名	著作物名	書名等	版元
小論文	ー	石田　光規	「人それぞれ」がさみしい「やさしく・冷たい」人間関係を考える	2022年 P28-54より 一部改変	筑摩書房

令和５年度　一般選抜・後期

看　護　学　部

小　論　文 (90分)

注　意　事　項

1　**試験開始の合図があるまで，この問題冊子の中を見てはいけません。**

2　この冊子は，４ページあります。なお，下書き用紙が２枚あります。

3　試験中に問題冊子及び解答用紙の印刷不鮮明，ページの脱落などがあった場合は，手を挙げて試験監督者に知らせなさい。

4　解答は，必ず**黒鉛筆**(シャープペンシルも可)で記入し，ボールペンや万年筆などを使用してはいけません。

5　**解答用紙には，氏名及び受験票と同じ受験番号を忘れずに記入しなさい。**

6　**解答は，必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。**

7　下書きの必要があれば，下書き用紙を利用してかまいません。

8　試験終了後，問題冊子と下書き用紙は持ち帰りなさい。

令和５年度　一般選抜（後期）　　看護学部

問　題　訂　正

○訂正内容

教科名　　小論文

頁・問題番号・行　　２ページ　上から６行目

誤）　その言葉が発せられた瞬間から，

正）　その言葉が発された瞬間から，

次の文章を読み，あとの問いに答えなさい。(150点)

「個を尊重する社会」というのは，一人ひとりがそれぞれに独立した意見をもち，それを率直にぶつけられる社会という意味合いもありました。誰もが，気を遣いつつも，率直に意見をぶつけ合うことで，よりよい社会を築いていく。そういった対話のある社会が目指されてきたのです。

(中　略)

人びとの心理的な発達を研究したエリク・H・エリクソンは，青年期に友人とかかわることの重要性を指摘しています。そこで想定される友人関係は，お互いの内面をさらけ出し，率直に意見をぶつけ合うようなつき合いです。このような関係性は，自我を確立するにあたり，重要な役割を果たすとみなされてきました。

しかし，1980年代の後半あたりから，若者の友人関係の変化が指摘されるようになります。具体的には，友人と深く関わろうとせず，互いに傷つけ合わずに，場をエンカツ(1)にやり過ごすことに重きをおく友人関係に変わってきたと言われています。

たとえば，新潟県の4年制大学に通う学部生に調査をした岡田努さんは，若者の友人関係の特性として，「気遣い」「ふれあい回避」「群れ」という3つの志向をあげています。ここで言われる「気遣い」とは，相手に気を遣い，互いに傷つけないよう心がける志向，「ふれあい回避」とは，友人と深い関わりを避けて互いの領域を侵さない志向，「群れ」とは，ノリなど集団の表面的な面白さを追求する志向です。これらは，「変化した」と言われる友人関係の特性に合致します。

同じような傾向は，他のデータからも読み取ることができます。

(中　略)

第一生命経済研究所の調査は，「多少自分の意見をまげても，友人と争うのは避けたい」という質問文に対して，青少年研究会の調査は，友人と「意見が合わないと納得いくまで話す」という質問文に対して，いずれも「よくある」「ときどきある」と答えた人の比率を示しています。

「多少自分の意見をまげても，友人と争うのは避けたい」という意見に対しては，1998年には男性の46.5％，女性の60.5％が「よくある」「ときどきある」と答えていました。この数値は2011年になると，男性66.2％，女性73.3％にまで跳ね上がります。[　ア　]，友人と「意見が合わないと納得いくまで話す」人は，2002年の50.2％から，2012年は36.3％にまで減ってしまいました。自分の意見を曲げてでも友人と争うのは避けたいと考えている人が増え，たとえ意見が合わなくても友人と納得のいくまで話す人が減っていることがわかります。

この結果は，「人それぞれ」のコミュニケーションが横行する社会の実情をよく表しています。「個を尊重」し，人と人をつなぎ止める材料が少ない社会では，争いや対立は，関係の存続を脅かしかねません。だからこそ私たちは，つながりを保ちたいと思う相手に対して，極力対立を回避するよう心がけます。身近な人との争いや対立を避けることは，今を生きる人びとにとって，とても大事なことなのです。

争いや対立を避けるにあたり有効なのが，「人それぞれ」のコミュニケーションです。というのも，

「人それぞれ」のコミュニケーションには，対立を表面化させず，チンセイ(2)化する作用があるからです。私たちは，お互いの意見が対立やぶつかり合いに発展するまえに，「人それぞれ」という優しさの呪文を唱えて，お互いの干渉を回避しているのです。

さて，それぞれの行為や主張を「人それぞれ」として受け入れる社会は，優しい社会と言えるのでしょうか。私はそうは思いません。というのも，人びとの行為や主張を「人それぞれ」と受け止める社会には，その言葉が発せられた瞬間から，対話の機会をさえぎるはたらきがあるからです。

かりに，皆さんが一緒に話している相手の決定や選択に，違和感や不満があったとしましょう。争いや対立を関係の存続を脅かすものととらえる社会では，このような違和感や不満は，「人それぞれ」という言葉に飲み込まれてしまいます。それゆえ，そのときにわき起こった違和感や不満が表面に出てくることはありません。

相手の心理をはかりかねるときも同じです。そのようなときは，下手に話題を掘り下げると，対立を引き起こすかもしれません。それならば，「人それぞれ」という形で会話を引き取って，場を無難に収束させるのがカンヨウ(3)でしょう。

こうした行動の積み重ねの結果，「人それぞれの社会」で交わされる会話は，当たり障りのない通り一遍のものになっていきます。

また，このような社会では，共感を得ることも難しくなります。[　イ　]，ある人が，なんらかの意見に共感を求めているとしましょう。ここで，「人それぞれ」という言葉が発せられると，それ以上に踏み込んだ会話を行うのは，難しくなります。だからこそ，私たちは「人それぞれ」という言葉に，なんとはなしの寂しさを覚えます。

（中　略）

「人それぞれ」という言葉には，一見すると，相手を受け入れているような雰囲気があります。しかし，この言葉は，一度発せられると，互いに踏み込んでよい領域を区切ってしまいます。それに加え，それぞれが選択したことの結果を，自己責任に回収させる性質もあります。

主義・信条を率直に表明できる「個を尊重する社会」を目指した私たちは，いつの間にか，それぞれの人たちを不透明な膜で仕切った「人それぞれの社会」をつくりあげてしまいました。「人それぞれ」の横行する社会で，対立や批判をも含んだ強靭（きょうじん）な関係や，共感をともなう関係をつくることは難しいでしょう。

このような状況は，友人といると却（かえ）って疲れてしまう，というヒニク(4)な結果をもたらします。先ほどあげた「青少年研究会」の調査では，「友達といるより一人が落ち着く」という質問への回答も求めています。この質問に「よくある」「ときどきある」と答えた人は，2002年の46％から，2012年には71.7％にまで上がりました。今や友人関係は，「気の置けない」ものではなく，「人それぞれ」の優しさに包まれた気遣いの関係に転じたのです。

共感をともなう関係がなくなると，人びとの孤独感も強まっていきます。2021年，菅（すが）前首相は，孤独・孤立対策担当室を設置すると同時に，孤独・孤立対策担当大臣も任命しました。コロナ禍ということもありますが，日本社会で，孤独・孤立に注目が集まっていることがわかります。

人とのつき合いが「人それぞれ」になると，私たちは，人間関係を「それぞれ」に自己調達しなければなりません。しかし，必ずしも望ましい人間関係を得られるとはかぎりません。また，さきほども述べたように，いまつながっている人から「切り離される不安」もあります。

このような状況は人びとに，人間関係を築くことのできない不安，または，今ある関係から切り離されてしまう不安をかき立てます。現代社会は，多くの人が孤立することへの不安を抱えた社会，とも言えるでしょう。

「人それぞれの社会」では，人びとの孤独感も増していきます。「人それぞれの社会」であっても，多くの人はつながりを確保しています。しかし，そのつながりは，お互いの気遣いにより成り立つものであるため，なかなか本音を話すことはできません。多くのつながりに囲まれているにもかかわらず，本音を出すことができないジレンマは，人びとの孤独感を高めます。誰も「本当の私」を見てくれないという感覚を高めるからです。

私が教えている学生にも，いくつかのサークルに所属し，アルバイトもしているのに，いずれの場でも「素の自分」を出せないと悩んでいる人がいます。しかも，そういった人は少数ではありません。こうした人びとを対象とした卒業論文が複数書かれるほどに目立つ現象になっています。

先ほど，「友達といるより一人が落ち着く」と答えた人が，2012年の調査では71.7％もいると述べました。しかし同じ調査で，「友達と連絡を取っていないと不安」と答えた人は，なんと84.6％もいます。つまり，若い人たちは，「友達といるより一人が落ち着く」にもかかわらず，「友達と連絡を取っていないと不安」と考えているわけです。

この結果には，「人それぞれの社会」で形成される友人関係への不安と疲労の色合いがにじみ出ています。互いに傷つけないよう，[　ウ　]，場を乱さないよう配慮する関係性は，高度なコミュニケーション技術を要するため疲れます。だからこそ，多くの若者は，「友達といるより一人が落ち着く」と考えます。

しかし，その一方，人と人を強固に結びつけてきた接着剤は弱まり，友人関係とはいっても，切り離される不安がつきまといます。だからこそ，人びとは，関係から切り離されないよう，高度なコミュニケーション技術をクシ(5)してでも，「友達と連絡を取って」いるのです。

（石田光規『「人それぞれ」がさみしい　「やさしく・冷たい」人間関係を考える』，筑摩書房，2022年，pp.28–54より，一部改変）

問 1　下線部(1)～(5)に該当する漢字を記載しなさい。

問 2　空欄[　ア　]～[　ウ　]に入る接続詞を，下の(　　)の語群から1つずつ選びなさい。

（このように，あるいは，一方，かりに，しかし）

問 3　二重下線部の「『人それぞれ』のコミュニケーション」とは何か，200字以内で説明をしなさい。

問 4　本文を読み，作者が述べる「個を尊重する社会」を実現するために，何をすべきか具体的な例やあなたの経験を挙げてあなたの考えを 800 字以内で述べなさい。